

# 日本ラテンアメリカ学会 会 報

№. 29

1988年12月10日

## 第29号 目 次

1. 理事会報告
2. 定例研究会
3. 学術文化情報
4. 近着会員業績
5. 事務局から
  - ラテンアメリカ研究センターめぐり (15)
  - 次期大会のお知らせ

## 1. 理事会報告

### 第39回理事会報告

1988年11月5日午後2時より上智大学7号館第1会議室にて。出席者：細野、中川、アンドラーデ、国本、大井、松下、住田、原田、山田（書記）（清水理事より委任状）

### 〔審議事項〕

- 1) 前々回、前回の議事録の確認（会報第28号2頁参照）
- 2) 年報編集の件：会員よりの投稿は、論文5、研究ノート2、書評1であった。12月末締切の予定で上記提案者とその他の会員に執筆を依頼する。欧文原稿を優先させることが望ましい。年度内の主な関連文献に関して簡単な紹介評価を内容とする書評もできるだけ多く載せる。論文審査を3名程度の会員に依頼する。
- 3) 次期大会の件：京都外国語大学において、来年6月10（土）と11（日）の両日にわたり、「ラテンアメリカ研究における地域と時代」を統一テーマとして行う。第1日目（午後）には、研究報告（分科会を編成）、総会、懇親会、第2日目には、全日を前記

テーマに関するシンポジウムにあてる。シンポジウム報告者の人選についてはさらに検討する。その際少額の費用で可能であれば、LASA会員及び外国人の参加を考慮する。大会組織委員を、大井委員長のほか、原田金一郎、大垣貴志郎、辻豊治の諸氏に依頼する。

- 4) 会員名簿の件：現行入会申込書、ラテンアメリカ研究者名鑑、他学会の会員名簿などを参考に会員に資料提供を求め、パソコンを活用し、業績などを含む会員原簿を整備する。公開事項（氏名、ふりがな、現住所、電話、勤務先、同住所、電話、職責、専攻分野－選択式－、関心地域、研究課題、会員、学生会員、準会員の別など）のをせた名簿を発行する。
- 5) 国際交流の件：i) 11月8、9両日国際文化会館と共催で日墨修好100周年記念シンポジウムを行う件につき、理事長より時間的制約からやむをえず事後承諾を得たい旨説明があり、了承された。ii) 来年9月プエルトリコで行われる米国ラテンアメリカ学会(LASA)大会に「日本、米国、ラテンアメリカ」というパネルディスカッションが予定されているが、本学会としてはこれに協力し、報告希望の会員の外部渡航資金の獲得手続きのため、アンドラーデ理事と理事長が要望書の発行などの形で協力することが了承された。
- 6) 各委員報告：
  - i) 会計：山田理事が会員名簿の作業費、印刷費の見積を次回理事会に提出する。
  - ii) 西日本部会：原田理事より、すでに10月1日京都外国語大学、11月1日南

— 財団法人 日本総合研究所・ラテンアメリカ資料情報センター —

当研究所は、産業・経済、国土・環境問題、国民生活、国際関係など幅広い分野にわたって、わが国が直面する政策課題を解明することを目的として1970年に設立された、民間独立系のシンクタンクである。

設立から10年ほどの間に、ラテンアメリカ地域に関するいくつかの調査研究を実施する機会を得、それらのうちのあるものは、「多国籍企業と南北問題」(1976～77年、財団法人 産業研究所)等の報告書としてまとめられた。

こうした中で、私たちはかの地のもつ、えも言われぬ魅力にひかれると同時に、この大陸の計り知れない底力を感じ、ラテンアメリカ研究の必要性を強く認識したのであった。当時、いくつかの大学ではすでにラテンアメリカに関する研究センターが開設されていたものの、民間のシンクタンクにおいては皆無に等しかった。そこで当地に関心のあるビジネスマンや学生、一般の方々など幅広い層を巻き込んだ研究サークルを始めようと考えたのである。とはいうものの、気迫だけは人一倍ながら、研究所のスタッフにはラテンアメリカを専門的に研究している者がいるわけではなく、スペイン語やポルトガル語もおぼつかない有様で、上智大学やアジア経済研究所などの外部の専門家の方々にご協力を得て、1981年の暮れに、当時の所長塩田長英(現理事)をセンター長としてスタートした。

担当スタッフの中には様々なラテンアメリカ像があり、発足当時はいろいろと欲張って見たものの、7年を経た現在、細ぼそとながら続けているのが月例の研究会である。これは“できるかぎり多くの国や地域、そして多岐にわたるテーマを、多くの語り手から”を心掛けて、毎回講師の方を囲んで、軽い飲み物などいただきながら夕べの一時を過ごそうというものである。今日まで回を重ねること50回、そして200名を越す人々がこの場を通じてお互いを知るようになった。年に一度は音楽を楽しんだり、写真をみたり、ラテンアメリカの料理を皆でつくって舌鼓をうったりもしている。

センターの活動も本年末には8年目を迎える。現在充電のためちょっとお休みをいただいているものの、人と情報とのこうしたやわらかい接点を、今後ともますます大切にしたいと考えている。

ところで、そもそも当センター開設のきっかけとなったのはラテンアメリカ地域を対象とする調査・研究であったわけだが、センター開設後も毎年何らかの調査・研究を手掛ける機会を得ている。

その主なものをあげると以下のようである。

- (1) 「経済協力対象国に関するカンントリー・スタディ」(1984年、国際協力推進協会)
- (2) 「アジア・太平洋地域における、メキシコ、パナマ、ペルー、チリ各地域の将来展望に関する調査」(1984年、総合研究開発機構)
- (3) 「ブラジル総合調査」(「特定市場の将来性分析調査 — ブラジル、ペルー、アルゼンチン」の一環として)(1987年、日本機械輸出組合)
- (4) 「ラテンアメリカの家族構造と機能に関する研究」(1988年、総合研究開発機構)

調査・研究にあたっては、研究所のスタッフがそのつど頭を悩ませつつ実施しているものの、外部の専門家の方々に教えていただいたり、助けていただくことの何と多かつたことであろうか。

こうしてわが身の非力を恥じながらも、ラテンアメリカと日本のよりよい関係を築くための相互理解・相互交流の一端を担えればと思い、微力ながら今後とも研究・調査活動やセンターの活動を続けていきたいと考えている。

なお、本センターに関するお問い合わせは下記へ。

▽102 東京都千代田区平河町2-16-15  
北野ビル

(財)日本総合研究所

☎03-263-6441

田坂、白紙まで(文責 白紙)

山大学で研究会を開催し、来る12月17日には大阪文化センターで第3回研究会を計画している旨説明。今後会報に開催通知が間に合わない場合、年1回ほど学会予算で全会員に葉書の通知を出す。会員数増加による中部部会の新設は、継続審議事項となった。

iii) 東日本部会：清水理事欠席のため報告なし。

iv) 会報：国本理事より、第29号を12月10日発行の予定の旨報告。

7) 運営委員の選任：田島久歳、横山和加子(事務局)、乗浩子、福嶋正徳(会報編集)、二村久則、高橋章(西日本部会)、三田千代子(東日本部会)

8) 新入会員の承認：4名の入会が承認された。推薦会員名の記入がない入会申込者については、最寄りの理事が連絡し、適格と判断すれば、推薦者になり、次回理事会にて審査することになった。

9) その他：次回理事会以降役員選出方法の改変について検討していく。次回理事会：慣行により、来年3月に開催する。

以上(文責 山田睦男)

## 2. 定例研究会(報告要旨)

西日本部会

○ラテンアメリカのフェミニズム

—中米を中心として—

松久 玲子

ラテンアメリカとひとくちに言っても、多様な政治、経済、社会状況のなかで、女性がおかれた立場は、さまざまである。しかし、その中で、被抑圧階級の女性たちのおかれた状況には、一連の共通点が存在する。それは、先進工業国の従属経済にともなう政治、経済的支配、そして自国の独裁政権や特権階級による抑圧と搾取、さらに女性であるためにこうむる差別という、三重の抑圧にさらされている事実である。

特に、中米のグアテマラ、エルサルバドル、ニカラグアのフェミニズム運動は、独裁政権等による政治的抑圧の大きさを背景に、女性の解放、社会的地位の向上をめざすだけでなく、階級闘争や、低開発と従属からの解放をめざす革命運動と緊密に結びつき、女性の抑圧をすべての民衆の抑圧の一部として解消しようとしている。

グアテマラでは、軍事政権に対するゲリラ活動に、特に厳しい抑圧にさらされているインディヘナスの女性たちが、武器をとり直接参加している。また、反抑圧民主戦線(FDCR)の中に、女性組織AIMURが誕生し、活動を始めている。

エルサルバドルにおいても、フェラブンドマルティ民族解放戦線の解放地区の中の民衆組織のひとつとして、ASUMUSA等の女性組織がつくられ、解放地区の生産、健康管理、教育、民兵の募集や前線への食糧補給などの活動を行なっている。また、これらの組織は、反独裁闘争の過程で女性たちを政治的に統合したAMESとともに、解放闘争内部のマチスモ的要素に対し、イデオロギー的闘争を展開している。

ニカラグアでは、1977年、AMPRONACが、反ソモサの女性組織として、弁護士や中産階級の女性を中心につくられた。その後、AMPRONACは、労働者階級と連帯し、サンディニスタ民族解放戦線(FSLN)のもとで、反ソモサ・ゲリラ活動の援護組織として重要な役割を果たした。また、女性兵士がFSLNの兵士に占める割合は、 $\frac{1}{4}$ から $\frac{1}{3}$ とされている。ニカラグア革命後、再編された女性組織AMNLAEは、新政府に働きかけ、売春禁止、女性労働者の労働条件改善、託児施設の開設など女性の社会参加と地位向上のための法的、制度的改革を実現した。さらに、識字運動、健康運動に積極的に参加し、女性の社会参加を拡大した。また、家族法の批准をめぐり、家庭における男女の平等と義務を求める運動を展開した。

中米三国にみるフェミニズム運動は、女性への抑圧をすべての民衆への抑圧の一部として位置づけ、反抑圧闘争、革命運動に女性が直接参加し、その過程で実質的に女性の力を示した。この直接行動を背景に、ニカラグアでは、革命の達成後、経済、社会、政治参加を通じて、女性が本来の権利を回復し、女性の解放を達成しようと模索している。

### ○19世紀後半ユカタン半島における

#### エネケン産業の発展

初谷 謙次（天理大学）

メソアメリカ原産の竜舌蘭の一種であるエネケン(henequén)の葉からとれる繊維は、抗張力があるうえに腐りにくく、船舶の索具、袋、蚊帳、ハンモックなどの原料に適している。しかし、植民地期にはエネケンは原住民共同体内の家族単位での栽培・手工業にとどまり、商業的栽培が始まるのは1830年以降のことであった。独自の近代化をめざすユカタン州政府の育成政策に後押しされて、州都メリダ周辺の同半島北西部でエネケンの商業的栽培が始められた。

エネケンの栽培には1年を通じて多数の労働力を必要とするが、原住民共同体が強固に存在するユカタン半島では新たに労働力を引き出すことは困難であった。したがって、エネケン産業は、既存のトウモロコシ・牧畜アシエンダが徐々にエネケン・プランテーションに移行してゆく形で発展した。また、エネケン栽培は最初の7～8年は収益がないうえ、繊維分離機、梱包用圧搾機、アシエンダ内輸送用軽便鉄道などの諸施設に多額の費用がかかる。しかし、カスタ戦争(1847～53年に同半島で起こったインディオ大反乱)後のユタカン半島の資本不足は深刻であった。そのため、ユタカン地方オリガルキーの経営するエネケン輸出会社を仲介にして、エネケン・プランターはアメリカ合衆国の繊維ブローカーやメーカーとリーエン契約を結んだ。融資を受けたプランターは現物で返済する義務があ

った。こうして資本不足は解消されるが、プランターは合衆国の資本に従属してゆくことになる。

1880年代には、合衆国で刈り取りと結束作業を1台でこなすトワイン・バインダーが普及し、その結束用の麻紐の原料にエネケンが使われるようになり、エネケン需要が急増する。ユカタン州では、空前のエネケン・ブームが起こり、エネケンの輸出額は1875年から10年で8倍、1902年にはなんと60倍にもなった。それと平行して、レフォルマ以降の共有地解体政策が80年代には急速に進展し、共同体はつぎつぎ解体され、土地とともに労働力もエネケン・プランテーションに吸収されていった。このようにエネケンのモノカルチャー構造が形成されるとともに、債務奴隷制は著しく強化され、最終的には債務額とは無関係にエネケン市場価格の変動によってペオンが売買される真の奴隷制が出現した。

### 3. 学術文化情報

#### 1) 第25回ラテン・アメリカ政経学会 定期大会

10月22日(土)と23日(日)の両日、神奈川大学において第25回ラテン・アメリカ政経学会が開催された。今年で創立25周年、いわば銀婚式である。研究大会に先立つ会員総会において規約の部分的な改正が審議、採択された。主な改正点は、役員任期が2年から3年に引上げられたが理事長の任期のみ連続二期を限度としたこと、事務局は神奈川大学に固定せず移動しうる表現に改めたこと、などである。従って来年の理事選挙を境に、理事長と事務局にも異動があるであろう。

研究大会の方は次のようなプログラムの下で進行した。第一日は、「ラテン・アメリカ政経学会の今後に期待するもの」という演題の下に外部の研究者を招いてのシンポジウムにあてられた。富岡倍雄(神奈川大学教授・新興国経済論)、土井輝生(早稲田大学教授

・国際私法、国際取引法)、深沢八郎(亜細亜大学教授・国際経済論)の三氏からそれぞれの専門の立場からのお話があった。冨岡教授は、ラテン・アメリカ政経学会の今後に期待するものということは結局ラテン・アメリカという地域の研究の重要性にかかわってくるが、中近東研究者としての立場より経済発展論や比較経済史をかんがえる上でも大変興味深い研究対象である旨の発言があり、また中近東学会の現状についても紹介された。土井教授は、学会創立時に若干関与した逸話などを述べた後、「知的所有権の国際的保護とラテン・アメリカ」という標題の下にこの分野における長年の研究成果の一端を披露された。このテーマは過去の研究報告のなかで欠落した部分であるから参考になった。深沢教授は、従属論のアジアにおける反響について述べられた。活発な質疑応答があったが、学会の今後に期待するという本来の企画の狙いには十分に踏み込めなかったことがやや心残りとなった。

第二日の23日(日)には次のような研究報告が行なわれた。

報告(1) 「ラテン・アメリカにおける経済調整」 石黒 馨(阪南大)

報告(2) 「ブラジルのインフレーションと安定化政策について」 西島章次(神戸大)

報告(3) 「パナマ運河条約と運河防衛」 黒崎利夫(海外貿易開発協会)

報告(4) 「ブラジルの農業開発プロジェクトとカトリック教会」 有水 博(大阪外大)

報告(5) 「ラテン・アメリカの解放の神学」 後藤政子(東京外大)

報告(6) 「ラテン・アメリカの地誌学について」 宮井 隆(神奈川大)

午前の部には報告(1)(2)のような経済関係の報告が集中した。この二人の若い研究者は、数式や図式を駆使して問題に取り組む方法を確立しつつあり、注目された。

午後の部は、政治・社会の研究報告に集中した。解放の神学に関する二つの報告を通じ

て、解放の神学の建前と本音の双方が浮彫りにされた観があった。

両日を通じ50名程度の会員の参加があり、この学会の規模としては盛大であったといえるであろう。(文責 石井陽一)

## 2) 第24回ポルトガル・

### ブラジル学会定期大会

第24回ポルトガル・ブラジル学会(Associação Japonesa de Estudos Luso-Brasileiros AJELB)\* が10月15日(土)と16日(日)の両日、拓殖大学で開催され、約45名の会員が参加した。大会第1日目に4研究報告が行われ、2日目には1研究報告と総会が開催された。本大会の研究報告及び報告者は以下の通りである。

1. "Classificação dos Verbos Portugueses" por Prof. Shiro Iyanaga (Univ. de Liinguas Estrangeiras de Tokyo)
2. "Constituinte de 88: Os Caminhos da Cidadania" por Sr. Átila Roque (pesquisador do Instituto Brasileiro de Análises Sociais e Econômicas-IBASE, Rio)
3. "Martins Janeira, Wenceslau Moraes e o Japão" por Prof. José Álvares (Univ. de Liinguas Estrangeiras de Tokyo)
4. "Comunicação Não-Verbal: Estudo Comparativo entre o Japão e o Brasil" por Profa. Noêmia Hinata (Univ. Sofia)
5. O Grupo Imigratório na Época da Integração Nacional no Brasil" por Profa. Chiyoko Mita (Univ. Sofia)

尚、次回大会は1989年12月21日と22日に国際文化会館及び上智大学で開催され、学会設立25周年を記念する講演会が予定されている。記念講演にはポルトガルより研究者を招き、アフリカ、ブラジル等を中心としたポルトガルの国際関係を展望する予定である。

\* AJELBは1965年に、日本のポルトガル語の研究者及びポルトガル、ブラジル研究者

の研究促進の場として設立され、毎年定期大会を開催し、研究年報 ANAIIS をポルトガル語で発行している。現在、会員はポルトガル人、ブラジル人を含め54名を数えている。以上（文責 三田千代子）

### 3) 「日墨修好100周年記念」

#### シンポジウム

1888年11月30日に日本とメキシコが修好通商条約を結んで今年で100年になるのを記念して、11月8-9日に国際文化会館でシンポジウムが開かれた。「日墨関係 — その歴史と21世紀への展望」をテーマに、当学会と国際文化会館の主催、外務省・メキシコ大使館などの後援と協力で行なわれたこのシンポジウムには約130名が集い、多様な視点から日墨関係、ひいては対ラテンアメリカ関係を再検討する機会となった（以下、敬称略）。

まず8日の第1セッションでは大来佐武郎「地球社会と日本の役割—メキシコ、ラテンアメリカ諸国との政治経済関係への展望」とビクトル・ウルキデ（エル・コレヒオ・デ・メヒコ教授）「地球社会におけるメキシコの役割と対日経済関係の今後の展望」の基調講演が行なわれ、債務負担の軽減と対日工業製品輸出への協力が要請された。

「近代世界における日本とメキシコ」というテーマで行なわれた第2セッションでは日墨関係の歴史が考察された。報告は次の通りである。国本伊代「近代日墨関係の形成とその特徴」、増田義郎「日本とメキシコ、16-19世紀」、ロタール・ナウト（メキシコ国立自治大学教授）「日墨修好通商条約の歴史的背景」、高山智博「日墨関係の百年」、ビクトル・ケルベル（メキシコ大使館三等書記官）「日本とメキシコ革命—モンロー主義に挑んだ仮想日墨共同作戦の記録」。以上の報告を通じて、16世紀に始まる日墨関係が太平洋をはさみながらも修好条約締結後緊密化したこと、日墨関係における米国の存在が大きいこと、またそれ故にメキシコ革命期にはモンロ

ー主義に挑戦するほどの対日接近がはかられたこと、戦後は経済関係の緊密化が進んでいるにもかかわらず相互理解が遅れているので積極的な取り組みが必要なこと、などが指摘された。報告のあと、日本がアジア以外の国と結んだ最初の平等条約であるこの修好条約をめぐって、締結に至る背景と条約の意義などが討論された。

2日目の第3セッションでは「地球社会の未来と日本・メキシコ」のテーマで、現在および将来に関わる諸問題を中心に、報告と質疑応答が行われた。

経済関係では細野昭雄「日本とメキシコの長期的経済協力」とヘラルド・ブエノ（エル・コレヒオ・デ・メヒコ教授）「国際通商システムの中の日本とメキシコ」、次いで技術関係として、中岡哲郎「環太平洋諸国間および日墨両国間の技術・経済への展望」とペドロ・シルバ（駐日メキシコ大使館科学技術情報センター所長）「日本の技術開発：メキシコへの応用と将来の展望」の各報告がなされた。4氏ともに共通して、日墨間のみならず日・墨・米三者あるいは環太平洋圏内の相互認識が必要である旨の指摘があった。

政治面でのビクトル・ビジャファーニェ（メキシコ国立自治大学教授）「メキシコと日本の近代化戦略と将来の日墨関係に関する考察」、恒川恵市「メキシコの政治動向と日本の役割」および外交についてのオマル・マルティネス・レゴレタ（エル・コレヒオ・メヒケンセ所長）「日墨関係の将来に関する考察」の各報告では、従来の経済偏重を廃し、政治面でも国際的規模の相互依存が要請されていることが主張された。

さらに文化の領域で山田睦男「互恵関係の鍵としての言語教育」は、一般レベルでのスペイン語教育の必要性を力説した。

全体を通じて個々のテーマはもとより、その根底に潜む問題点が浮き彫りにされ、各分野ともに学問的刺激的の多い大会ではあった。

なお有能な同時通訳者の助力を得、その功

績大ではあるが、会場ではイヤホンを要しない参加者が多く、今後の研究交流の在り方と個々の研究者の責務を痛感した次第。

最後に増田義郎氏の総括では、日墨両国の従来の研究を評価し発展させるべく、学術およびその経済的基盤の重要性を各方面に働き掛けねばならぬことが提言された。

(文責 乗 浩子・奥山恭子)

#### 4) 昭和63年度文部省科学研究費補助金による海外学術調査・共同研究・学術図書

##### 【学術調査】

- 「新世界ザルの生態と社会構造の比較研究」(コロンビア) 伊沢紘生(宮城教育大)
- 「ラテンアメリカの都市首位性拡大の諸要因に関する学術的研究」(アルゼンチン・ブラジル・メキシコ) 山田陸男(筑波大)
- 「ブラジル北東部における土地利用・水利の変遷と生態系の地域的变化」(ブラジル) 西沢利栄(筑波大)
- 「ミナミブナ林の時空分布」(チリ) 西田 誠(千葉大)
- 「古代アンデス文明の生成過程の研究」(ペルー) 大貫良夫(東大)
- 「アメリカ大陸における高精度天文観測とそのデータ処理システムの研究」(チリ・メキシコ・アメリカ) 岡村定矩(東大)
- 「日本と南米太平洋側の新第三紀地質学的事件の対比」(コロンビア・エクアドル・チリ・ペルー) 土 隆一(静岡大)
- 「熱帯新大陸における広鼻猿類の種分化に関する研究」(ブラジル・アルゼンチン・ボリビア・コロンビア) 野上裕生(京大)
- 「中南米の寄生吸虫症、特にヴェネズエラにおける肺吸虫症の病態生理学的研究」(ベネズエラ) 辻 守康(広島大)
- 「中南米におけるリーシュマニア症とその伝播に関する研究」(エクアドル) 橋口義久(高知医大)
- 「戦後社会史としての海外移住」(パラグアイ) 鶴木 真(慶応大)

- 「環境資源利用をめぐる比較人類生態学」(ボリビア) [継続] 柏崎 浩(東大)

##### 【共同研究】

- 「チャカルタヤ山におけるUHE宇宙ガンマ線の研究」(ボリビア・サンアンドレス大学物理学研究所) 金子達之助(岡山大)
- 「ヘビとコウモリの赤外線情報処理機構の比較」(ベネズエラ国立科学研究所) 岸田令次(横浜市立大)

##### 【学術図書】

- 『日本宗教と日系宗教の研究—日本・アメリカ・ブラジル』 中牧弘允著 刀水書房

#### 4. 近着会員業績

[抜] 石井陽一「スペイン改正手形・小切手法—解題と条文の翻訳—」(一)(二)(慶応義塾大学法学研究会編『法学研究』第61巻7号及び8号)

[抜] 三橋利光「ブラジルにおけるオーギュスト・コント実証主義の受容と展開(Ⅲ)—世紀転換期(19・20世紀)のブラジルに関する史的考察—」(『イベロアメリカ研究』第X巻第1号1988年前期)

[抜] 三田千代子「ナショナリズムと民族集団」(『外交時報』No. 1251昭和63年9月号)

[抜] 同上「熱帯のルーツ・ブラジル文化」(『ソフィア』第37巻2号1988年夏季)

[抜] 角川雅樹「1985年メキシコ大地震経験から—地震災害と精神衛生—」(『精神医学』第30巻7号1988年7月)

[誌] 同 「バージン諸島」(『人間の場から』第12号1988年8月 東海大学留学生教育センター)

[誌] 上智大学イベロアメリカ研究所『ソフィア』第37巻2号(1988年6月)

[誌] 同 『イベロアメリカ研究』X巻1号(1988年8月)

## 1989年第10回定期大会のお知らせ

### 日程とテーマ

1. 期日：1989年6月10日(土)、11日(日)
2. 会場：京都外国語大学
3. 第1日目：自由論題報告、総会、懇親会  
第2日目：シンポジウム「ラテンアメリカ研究における地域と時代」

第1日の自由論題報告については、分科会編成のため報告希望者を募集する。第2日目のシンポジウムのテーマは、ラテンアメリカ研究の全分野に関係する基本的な問題だとの認識のもとに選ばれた。たとえば、地域区分の呼称の問題、時代区分の問題な

どで学会として統一見解が出せるものは出し、分野によって異ならざるを得ない場合はそれぞれの見方を知る機会にしたい。報告者については組織委員会を中心に人選していく。とくにシンポジウムに関する意見、希望あるいは討論内容についての提案は下記の宛先へお寄せ下さい。なお、自由論題報告希望者への申し込み用紙その他は別便で会員に発送します。

### 大会事務局住所

京都市右京区西院笠目町6  
京都外国語大学メキシコ研究センター  
第10回定期大会組織委員会事務局  
大井邦明

### 5. 事務局から

#### i) 新入会員 (第39回理事会承認)

No. 29 1988年12月10日発行  
▽305 茨城県つくば市天王台1-1-1  
筑波大学社会工学系細野昭雄研究室内  
日本ラテンアメリカ学会事務局  
☎0298-53-5067